

平成29年度第3回「知事と一緒に生き生きトーク」の発言要旨

- 1 テーマ：『アートで発信「地域の魅力」』
- 2 日 時：平成29年8月22日（火）
- 3 場 所：岡山県立美術館（岡山市北区天神町8-48）
- 4 参加者：アートを活用して地域の魅力を発信している方々：7名

5 知事挨拶

美術や芸術の関係での生き生きトークの開催は初めてになる。本日は美術や芸術に造詣の深い皆さまから色々と教えていただいて、皆さまの活動がどう役に立っているか、こういったことを支援してもらえると助かるなど、お話を伺いたい。

6 発言内容

【活動紹介】

- ・法律事務所で仕事をしている。昨年、県が実施している「まちアートマネジメント講座」を受講した。元々、文化や芸術に関心はあったが、弁護士業務とは畑違いであり、あまり携わる機会がなかった。商標や著作権など知的財産の関係で文化分野の話もでてくることもあり、活動に携わりたいという思いがあって取り組みを始めた。まちアートマネジメント講座の開催地であった、矢掛で一年間活動し、今年も引き続き、芸術家のイベントを企画している。
- ・主婦だが、個人的に玉野の明神鼻の小屋を拠点としたアートイベントに携わっている。アートイベントに携わったのは「まちアートマネジメント講座」の受講がきっかけだ。当時、香川大学大学院に通っており、修了研究で水島地域の百間川のホタル復活の活動に参加しながら、ホタルが復活したら川に対する関心がどう変化するかを検証する活動の中で、ホタルを川でプロジェクションマッピングに投影するといった活動もしてきた。
- ・生まれも育ちも成羽町で岡山から出たことがない。色々なところに出向くと、岡山、成羽はいいなと感じる。食べ物も空気もおいしいし、全国的にも美術館が多い。成羽美術館は64年前に会館した老舗だ。県下では公立第一号の美術館である。コレクターとしても知られている洋画家、児島寅次郎の地元ということもあり、彼が集めた資料の展示や成羽の化石を中心に展開している。成羽町は日本で最初に森ができた場所といわれている。23年前、リニューアルした際に設計したのが、建築家の安藤忠雄であり、児島寅次郎、古代エジプト、成羽の化石、安藤建築この4本立てで事業を展開している。
- ・会館7年目の瀬戸内美術館からきた。地域の人と協働しながらやっている。歴が短いので、日本画をはじめ、長淵剛、さくらももこなど定番な方、若手の芸術家を取りあげた展覧会、お化けや牛窓写真展など子ども向けのものなどいろいろなラインナップで展覧会をやっている。所蔵美術品が少ないため、企画型の展覧会を中心に運営している。

- ・生まれは広島だが倉敷芸術科学大学を卒業して、そのまま岡山に住んでいる。大学でガラス工芸を学び、卒業時に自分のガラスの作業場を探している時に、玉野市にアトリエができる話を聞いて、岡山に住んでいて居心地が良かったのでそのまま玉野に工房を構える形で移住した。2010年から瀬戸内国際芸術祭が始まり、市の中心市街活性化基本協議会の移住プロジェクトとして、クリエイターを玉野に呼ぶ「宇野づくり」というプロジェクトが始まり、その活動に携わって6年目となる。ガラスの制作とクリエイティブな方の移住を支援する窓口をやっている。
- ・専門学校の教員をやりながら、アートイベントやコーディネーターをしている。最近ではディレクター業務が多くなっている。イオンモール岡山のパブリックスペースでのワークショップや、ライフワークとして、エコルという活動をしている。エコルはフランス語で学校という意味で、地域を学びの場と考えて素敵な場所や人と出会えるようなワークショップを提供している。子どもを中心に地域皆で学んでいこうという取り組みで、フリーマガジンも配布している。
- ・作家活動をしている。美術館の運営や小学校の中にギャラリーをつくるなど、倉敷を中心に活動している。廃業した美術館の建物を活用した美術館だが、館長や学芸員がいないのが特徴だ。小学校のギャラリーは、倉敷市教育委員会の委託事業で、文化や芸術で人が集まれる場所をつくるという活動をしている。児島の吹上美術館が離島に移ることが決まり、その準備をしている。

【活動の課題や行政に支援してほしいこと】

- ・やかげ芸術街道というイベントを実施している。資金が必要ということはこれからもずっと課題になると思うが、共感してもらって一緒に活動してくれる人の確保が大きな課題だ。活動のスタッフとして名前を連ねてくれる人はいるが、事前準備や調整などを含めて動いてくれる人はなかなかいない。仕事をしながら携わってくれている人が多く、マンパワーが不足していると感じている。
- ・主婦や学生など女性が多いチームで活動しているが、動ける時間、融通が利く時間が違うというのは課題だ。地域で活動をしようと思う時には、その地域のこういった人であれば一緒に共感してくれるか、こういった人を通さないとその活動ができないかなど、考慮することがたくさんある。色々な人のネットワークがあってこそできることで、不確かなことも多い。
- ・県立大学とのコラボレーションでミュージアムグッズを作成して4年目になる。成羽の化石は2億年前であり、成羽フローラと名づけて県立大学に相談をしたのがきっかけだ。県立大学から前期の授業として、デザイン学科の学生たちと面白いことをしないかと提案があった、最初の2年間は化石、昨年は児島寅次郎、今年はティラノサウルスをテーマにグッズを制作している。大切な人にプレゼントできるものをコンセプトにきちんとした商品を作り上げることを心掛けている。商品は必ずアカデミーチェックを受け、美術館が専門の研究所や、プロの雑貨屋、経営者などにトレンドに合っているかを聞いた上で制作している。7月に販売したアイテムは、もう完売している。大学生はこれからどう生きていくか考える重要な時期であり、岡山にはすごい文化資源があるということをデザインを通じて感じてもらうために取り組んでいる。
- ・人員不足は常に思うところがある。私の場合は、正規職員は一人で他は臨時職員や非

常勤職員で対応している。学芸員の業務や教育普及に加え、広報や観光の要素まで求められており、一人でやっていると後を引き継ぐ人がいない。後任に引き継ぎ、自分は次のステージへ行くということができない状況であり、リスクマネジメントの面からも怖いと考えている。

- ・移住プロジェクトでは住むことを中心に、あらゆるサポートをしている。地域の人たちにもすごくお世話になっている。「この人が言うなら仕方がない」というような人とのマッチングや人の巻き込み方などにも気を配りながら進めることもある。マイナスの要素、あまり良く言わない人であったり、活動にとっては負荷がかかる部分などは必ず出てくる。そのあたりの対処や、移住してきた方のフォローアップなどの労力は5年6年と活動していく中で、次の新しい課題だと思っている。
- ・一般の親とか子を対象としてイベントを実施しており、アートを言葉としては出しにくい場になっている。活動の中で親の苦労や課題を見つけるようにしている。子育ての孤立や遊びに行けないといった苦労や課題に、アートとして解決の糸口が見いだせるようなことができるのではないかと考えている。アートイベントを使って、親子が楽しんだり、アーティストも一緒に楽しんでいくという仕組みづくりが必要になってくると考えている。活動自体は、拠点をつくらず、色々なクリエイターとつながったり離れたったりしながら、常に新鮮な状態にして取り組んでいる。
- ・作家がコミュニケーションをいかにとるかは課題だ。当館では、作家が作品のそばにいていただくということを出展の条件にした展示会も開催した。作家が説明することで、分からないながらも、地元の人に想いが伝わるのではないかと考えている。
- ・人手不足や資金不足はどこでもあると思うが、アートイベントは各地で行われており、差別化するのが課題になっている。各自治体の枠を越えて、一緒にできるものは一緒にする、中間的な場所で開催するなど、ある程度統合してやるということも考えているのではないかと考えている。
- ・今後、企画したいアートイベントとしては、音楽とのコラボを考えている。アートだけを見るのではなく、ミュージアムコンサート、作品を鑑賞している中で、いつの間にか音楽が演奏されている。音楽とアート作品をあわせて、その絵が描かれた時代に制作された音楽を演奏する、そういったことを考えている。成羽美術館は音響が良く、バイオリンが音を出しただけで全館包まれるような感覚だ。多くの方に体感していただければ、継続的に実施できるのではないかと考えている。美術だけではなく、音楽や時代背景も含めた形で企画展ができたらいいと思っている。
- ・アートイベントを紹介する見本市の文化版のような場所がほしいと思っている。県内の美術館を一斉に集め、マスコミや作家を呼び、それぞれの美術館がどういった展覧会を予定し、どんな特徴があるなどを全国のメディアにアピールできるような場があればいい。
- ・アートの役割の一つとして、地域のコミュニティの再生がある。アートイベントは廃墟の掃除や草刈りなど、多くの人が力を合わせながら、日替わりで対応してこそできている。地域の方々が楽しく掃除をしている姿はほかのイベントではあまり見ることがない。みんなで何かを成し遂げるところが大きいポイントだと思う。そういったことに喜びを感じれる人材が大切で、小さい頃にそういったイベントを体験し

ていれば、そういった感覚が無意識に備わっていくのではないかと思う。例えば、幼稚園などにアーティストが訪問し、保育士さんがやらないような遊び方を、地域の人とも関わりながらできるようなイベントを行政でできないか。

- ・備前焼ほど、文化で地域活性化がなされた土地はないと思っている。備前焼の特徴はその土地で生まれたことだ。その土地のものを使って、その土地でしか作れないものを制作しているので魅力的だ。町に来て、その町でしかできないことを体験する。その土地でどういうものが作り出されるかということを考えることが重要だ。体験をどういうふうに持って帰ってもらうのかということは、視点として必要だと思う。
- ・岡山の美術のいいところは、他の自治体と比べても、美術館同士の仲が良く、美術館関係者と作家の距離が近いということだ。
- ・東京オリンピックが開催されるが、東京にあるホテルだけでは足りないのが分かっている。静岡など東京から1時間圏域の自治体が色めき立っている。岡山にも来る可能性があると思っている。空路で一時間ちょっとでいけるのは岡山の利点で、空港から宿泊場所までの移動や魅力を担保すれば人が多く来てくれるのではないかと考えている。
- ・県の移住フェア等で窓口に行くことがあるが、住みやすさや安全・安心などは前面にだしているが、文化を押ししているところはほとんどない。そういった場所で文化を前面に出してアピールしてもいいのではないかと考える。自分の暮らしを豊かにしたいと思っている人は文化に対しての興味も高い人が多い。

【知事のまとめ】

- ・岡山は先人たちの伝統もあって、アートに理解があり、応援してきた人が多い。外の話を知るとかなり恵まれている。皆さん方が携わっていることは、生存に必要なものではなく、社会の豊かさの象徴で、理解できないという人もいます。しかしながら、50年前に突拍子もないデザインや芸術だったものが、今、普段の当たり前のものとして使われ、溶け込んでいるものもある。もしかしたら、皆さんの活動の成果も、数十年後に、世の中で当たり前のものとして浸透している可能性もある。ぜひ、それぞれの立場で頑張ってください、文化の薫り高い岡山県を盛り上げていただきたい。